高校３年生

生き方を探るⅡ
－自分を知って主体的に進路を切り開く－

石川久美・加藤容子
岡村　明・寺井　一
福谷　敏・丹下容子

【抄録】　高校３年生総合人間科「生き方を探るⅡ」は、中学１年生で始めた「生き方を探るⅠ」の締めくくりとしての位置にある。高校卒業後の進路の最終選択という転機において、６ヵ年の自分の変化を捉え直し、社会への関わり方を十分に考えて主体的に進路を切り開いていく力を育てることを目標としている。

【キーワード】　生き方　進路　キャリア形成　社会への関わり方

1. はじめに

社会の変化によって、親の職業や様々な物が作られる過程が生徒たちにとって見えにくくなった。家業を継ぐケースが減り、職業選択の自由度が増す一方で、多様な職種の中から何を目指してどのように努力すればよいのか迷う生徒もいる。高校３年生では、６ヵ年の自分の変化を捉え直し、どのように社会に関わっていきたいのかを考えて主体的に進路を切り開いていって欲しいという願いを込めて－自分を知って主体的に進路を切り開く－というサブテーマを設定した。

2. 学年目標

生徒が自らの自己形成の過程を知り、主体的に生き方を選択することができる力を育てる。進路希望別の６つのグループに分かれ、学外でのフィールドワークおよび学外講師との交流会によって自分の進路決定に関わる人から直接学ぶ。また、スピーチや研究集録原稿作成の過程において、自分の将来に対する認識を深めることによって、総合人間科の目標である「自分の人生を自覚的に選択する力を育てる」ことをねらいとしている。

3. 一年間の活動内容

４月10日　オリエンテーション
４月16日　進路希望別グループ希望調査・第１回進路希望調査
４月24日　６グループの代表の決定、フィールドワーク先検討資料準備
５月８日　フィールドワーク準備①
５月15日　フィールドワーク準備②　学外講師検討①
５月29日　フィールドワーク準備③　学外講師決定・交渉
６月５日　フィールドワーク
６月12日　お礼状発送、フィールドワーク報告会準備
６月26日　フィールドワーク報告会
７月３日　学外講師を囲む会準備、第２回進路希望調査
７月10日　学外講師を囲む会
９月４日　スピーチ原稿・集録原稿執筆①
９月25日　スピーチ原稿・集録原稿執筆②
10月16日　スピーチ原稿・集録原稿執筆③
10月30日　グループ内スピーチ
11月13日　学年全体でのスピーチ
11月20日　第３回進路希望調査
12月11日　研究集録原稿完成

4. 生徒の取り組みの様子と変容

(1)フィールドワーク

進路部と連携して進路希望調査を行ったのち、進路希望の近い６つのグループに分けてフィールドワークの事前学習や事後学習を行った。総合人間科６年目であるため、手際よくフィールドワーク先を捜し交渉を行うことができた。訪問先は以下の通りである。

A組　フィールドワーク先		B組　フィールドワーク先		C組　フィールドワーク先	
1	県小児保健総合医療センター	1	(株) カクムフードサービス	1	名古屋市立東市民病院
2	岐大農学部生物資源利用	2	岡田純奈　バレイ団	2	名大　経済
3	名古屋国際センター	3	名大　多元数理	3	国際観光専門学校
4	名城大学	4	小学校の恩師	4	名工大　工　社会開発
5	東山動物園	5	ＥＣＣエアライン学院金山校	5	名古屋国際センター
6	名大医学部理学療法学科	6	名大教育学部	6	名大医学部理学療法学科
7	県大文学部児童教育	7	名大生命農学	7	名大医学部保健学科看護
8	県大英米学科	8	県大文学部児童教育	8	岐大農学部生物資源利用
9	名大文学部日本史	9	名大工学部	9	浜松医大医学部看護学科
10	名大法学部	10	県大文学部児童教育	10	名大　情報工学

11	中央福祉専門学校	11	風吹ジム	11	愛教大
12	富士通　ＶＬＳＩ	12	内田さん（画家）	12	西田さん（消防士）
13	名大医学部理学療法学科	13	大島さん（画家）	13	藤田保健衛生大学
14	岐阜聖徳大学入試課	14	愛大　車道校舎	14	同朋大学
15	愛大　車道校舎	15	モーツアルト音楽院千種校	15	愛知県モーターボート協会
16	淑徳大　現代社会	16	中京大　入試課	16	岐阜聖徳大学
17	岐阜大学工学部	17	中京大　入試課	18	中京大　入試課
18	鈴木さん（卒業生）	18	JICA中部国際センター	19	名大生命農学
19	名大　環境学研究科	19	名大医学部保健学科看護	20	名大　工学部　材料工学
20	淑徳大学図書館情報	20	名大医学部保健学科看護	21	愛教大
21	淑徳大　現代社会	21	名古屋医療秘書福祉専門学校	22	愛教大
22	名大　国際開発	22	大曽根水道	23	名古屋国際センター
23	中部国際センター	23	中京テレビ	24	慈恵きものファッションカレッジ
24	名大教育学部	24	桜花学園	25	名大　情報工学
25	名大教育学部	25	名大　経済	26	南山　経済学部
26	名工大　社会開発	26	名大　経済	27	市教育委員会学校保健課
27	愛大　車道校舎	27	美容専門学校	28	名大医学部理学療法学科
28	愛知県警	28	名大　法学部	29	卒業生
29	名大医学部理学療法学科	29	名大生命農学	30	名市大　薬学部
30	名大　工学部	30	日産自動車整備学校	31	中京大　入試課
31	名大医学部理学療法学科	31	大島幸夫さん（画家）	32	名音大
32	精神科医師	32	（株）日本メナード化粧品	33	愛知大学
33	中京テレビ	33	名大　環境学研究科	34	名大生命農学高分子生物材料
34	名大医学部保健学科看護	34	南山大学	35	桜花学園
35	名大医学部理学療法学科	35	愛知県警	36	動物園
36	愛大　車道校舎	36	名大生命農学高分子生物材料	37	愛知淑徳大学図書館情報
37	南山大学　英米学科	37	名大　工学部　材料工学	38	南山大学
38	若山信義さん（農業）	38	名大　工学部　　航空工学	39	愛教大
39	県大英米学科	39	動物園	40	南山大学
		40	名大医学部理学療法学科		

(2)学外講師を囲む会

毎年行っている企画であるが、最初に各グループでどのような講師を招きたいか希望をとって講師を決めていった。事前に質問を考えて先方に送るなどの事前学習を行い、当日は各グループごとに講師の出迎えや司会・進行を生徒が行った。ご協力いただいた講師の方々は以下の通りである。

番号	名前	職業・経歴
①	石原秀雄さん	彫刻家
②	櫻本良子さん	薬学部卒業　薬局勤務
③	村松智恵さん	看護師　国立名古屋病院勤務 がんセンターに２年間勤務経験あり
④	平松由江さん	整体（愛健はり接骨院）
⑤	樋口美穂さん	Autoliv　Japan （スウエーデン企業）
⑥	斉藤公史さん	Autoliv　Japan テクニカルマネージャー
⑦	中島秀夫さん	トヨタ自動車　人事課 名大附属卒業生
⑧	石川　勝さん	コンピュータ会社経営

次の文は生徒の感想文の一部である。

「とっても感動した。絶対理学療法士になりたいと思った。理学療法士は生死の間にいる人ではなく回復途上の人だけを相手にすると思っていただ、そうではないことを知った。また、それぞれの治療法の根本理念を教えてもらえてよかった。私が学びたいのは整体よりカイロだと知った。“人の喜びが自分の喜び”とか“生きてるってすごいこと”とか決まり文句だけど、理学療法士はそれを毎日マジで肌で感じるすごい仕事だと思った。」（Ｙさん）

「自分も命は大切だと思う。でも、看護師である村松さんが“命の大切さを感じる”とおっしゃるとその重さをすごく感じる。こども病院の心療内科では子どもたちが家と同じように生活できるように看護師はケアをすると聞いていた。今日も村松さんから“その患者さんらしい生活”をという言葉を聞いて、どんな場でも看護師にとって患者さんにありのままの生活をしてもらうことは大切なことだと思った。自分も看護師になるための勉強をする上でいつもこのことを考えていたいし、自分も早く看護師になりたいと思った。勉強がんばるぞ！！」（Ａさん）

この二人はここで宣言した通り、理学療法と看護の大学にそれぞれ進学した。この二人の例は自分の進路に直結した内容で、毎日の学習意欲に直接影響を与えているが、次の生徒のように、自分の進路と直接関わっていなくとも、誇りをもって働いているプロからその姿勢を学んでいる生徒も多かった。

「自分の進路とは少し離れたお話だったけれど、とても興味深かった。どんな進路でも気持ちの上で共通して

いるものがあると思う。」（Ｉさん）

⑶スピーチおよび研究集録

６ヵ年の集大成である研究集録の原稿書きを行う中で、各グループごとにスピーチを行った。スピーチと研究集録の内容は「自分の生き方について」か、「自分の生き方に関わるテーマ」を選ぶかのどちらかとした。そしてグループの推薦を受けて選ばれた14人の生徒が学年全体の前でスピーチを行った。14人のテーマは次の通りである。

①「スポーツ科学」　②「理学療法士」　③「学ぶこと」
④「数学の『世界』」　⑤「大学・・・」
⑥「我が人生に狂いなし」　⑦　「自営業の子」
⑧「権利と法」　⑨「将来やりたいこと」
⑩「戦争と国際理解」　⑪「総合的な学習の時間について」
⑫「心理カウンセラー」　⑬「芸術その２　美術について」
⑭「日本の医療界について考える」

堂々と発表している生徒の姿を見ながら、６ヵ年の成長の大きさを実感し、感慨深いものがあった。さらに、印象的であったのは、話を聞いている生徒たちの姿勢であった。２時間におよぶスピーチの間緊張が途切れることなく真剣に聞き、実に暖かく反応していたからである。この空間こそが、６ヵ年かけて自分たちで創り育ててきた“学び合いの場”であった。

普段見ている友人がここまで深く考えているのかという再発見も多かったようである。⑦番目の「自由業の子」のスピーチでは、Ｎさんが、週末に父の家業である水道の配管工事を手伝い、床下に潜って作業する様子などをユーモアを交えて話した。同じ歳の友人がその部分ではプロとしての自覚をもって仕事をしていることに対する反響が大きかった。さらに、両親や祖父母が働く姿を見て、“恩返しをしたい”と気負うこともなく爽やかに語る彼女の姿勢には学ぶものがあったようである。

生徒の感想を見ると、「他の生徒のスピーチも聞きたかった」とか「自分も発表したかった」という意見が少なからずあった。受験直前の大切な時間を使ってのスピーチではあったが、生徒たちにとって、自分の進路を見つめ直し進路を切り開く努力の方向性を改めて考える貴重な機会となった。

また、研究集録の原稿は慌しい中での仕上げとなったが、出来上がった集録を読んで「こんなにいろいろ深く考えているなんてみんなすごい。」と言っている生徒が多かった。中には、普段はちゃらんぽらんに見えるある生徒がこんなふうにまじめに考えていることがわかって“涙が出た”などと言う生徒もいた。

今までの自らのキャリア形成を振り返ってまとめたものと自分と大きな関わりのあるテーマを設定してそれを題材として書いたものという２つのタイプを用意したのは、自らのプライバシーをこのような形で公表することに抵抗を感じる生徒もいると考えたからである。しかし、いずれにしても、それぞれの生徒の考え方が非常によく表れた研究集録となった。また、それぞれが様々なことを考え、迷いながらも迷っている自分を受け入れている様子が赤裸々に描かれている文章が多く、そこには、これから自分で人生を切り開いていこうという前向きな姿勢と若いエネルギーを感じ取ることができる。卒業した後で学校を訪れて、「疲れたときに、研究集録を読むと元気が出る」という言った生徒もいた。生徒たちが大切にしてくれる研究集録を創る手伝いができたことは私たち教員にとっても幸せなことである。

5. 成果と課題

研究集録の文章の中に、次のように述べている生徒がいる。

「高校３年生の今年、総合人間科の授業があってよかったなあって改めて思った。それは**考える時間を総合人間科はくれたから。自分の興味のあることや自分について見つめな直すこともできた。特に今年は自分の将来についてじっくり考える時間をくれた。**」（Ｎさん）

「名大附では、**進路決定のきっかけになる要素がたくさんあった。それはすでに書いたとおり、部活の友達や後輩、クラスの友達との関わりだったり、学校祭などの行事や総合人間科の授業であったりとさまざま。**（中略）考えることはなかなかできないと思う。テーマがなければ考えることはできないし、自分でテーマを見つけることは少し難しいと思う。でも**総合人間科は私にテーマをくれた。そのおかげで、いろいろと考えた。そして、その上で進路を決定することができたのでよかった**と思う。」（Ｔさん）

このように、**総合人間科が考える機会となった**　という生徒が多かった。Ｎさんは、「自分の興味のあることや自分を見つめ直す」ことや「自分の将来について」考える機会となったというように、自分にとっての総合人間科の意味を分析している。また、Ｔさんはずいぶん迷って進路を決めたのであるが、その過程を振り返って、何が自分の進路決定に影響を及ぼしたかのかを検討している。

次の生徒は、「大学・・・」という題で話をした生徒の研究集録の抜粋である。かなり多くの生徒たちが共感しながら聞いていた。

「大学に行かずにフリーターをやって、同時にいろいろな仕事に挑戦して自分のやりたい仕事を見つけたい。（中略）大学いって嫌イヤながら勉強して就職できないより、勉強なんかしないで、自分のやりたい仕事が見つかったらそれに向けて勉強などをがんばって就職する、とい

うことの方がいい。世の中をなめてると思われるかもしれないが、僕はこの考えを大事にしたい。(中略) どうなるにしても自分自身のことでこれからの貴重な数年間のことなので、後悔しないようにしたい。」(Tくん)

このように**迷いながらも迷っている自分を受け入れる**姿勢が見られる生徒も多かった。自分がまだ何をしたいかわからなくとも、後悔しないように全力で進路を判断しようとしている。このように迷う状況であっても次のSさんのように、名大附属での6年間を次のステップにしようとする生徒が多数いた。「私は将来やりたいこともまだはっきりわからない。はっきりとした目標をもった友だちの話を聞くと気は焦る一方。まだ私は大人になれない。もう少し執行猶予をもらうために大学進学を決めた。(中略) 名大附で得たものをしっかりと握りしめて未知なる世界に飛び込んでたくさん学びたい。不安もいっぱいあるけど、自分ができないって思ったら、できることもできなくなっちゃう。逆にできないことをできるって思ったらできるかも知れない。私が私の可能性を信じなかったら誰が信じるのだろうか。」(Sさん)

次の文は卒業式の答辞の抜粋である。

「私たちは豊かな可能性を秘めた種だ
名大附という肥えた土壌に芽をだした
この3年間でたくさんの人に出会い、たくさんのことを学んできた
それは、**自分の軸みたいなものだとか、人とのつながりとか、自分で考える力**
だから、これからたくさんの苦労を経験すると思うけれど
きっと切り抜けられる　乗り越えられる
この貴重な時間を名大附で過ごしたことをとてもこころ強く、また誇りに思う
今やっと地上に顔を出したばかりの小さな芽だけれど
これから**社会に向かって枝を伸ばそう**」

(第52回卒業生答辞)

このように宣言して卒業していってくれる生徒を育てることこそが教育の目標ではないかと私は考えている。次の文は研究協議会のキャリア座談会での生徒の発言である。

「いろいろなことがあるだろうけれど**社会への関わり方**みたいなものが身に付いていれば乗り越えていけるような気がする」(2004. 2. 13　本校研究協議会　キャリア座談会より)

この文にあるように名大附属での6年間（3年間）が社会への関わり方の基盤を築いてくれることを切に願っている。そのためには、社会の変化による生徒の変化を常に分析しながら、学校教育の場で何ができるのかを問い続けねばならない。